



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy



TOYO UNIV.

Newsletter No.19 2014. 8

フィロソフィとしての自然

センター長：山田 利明

中国の古典詩を評して、唐詩は情緒、宋詩は理知といわれる。確かに唐詩には風情にうったえて、情緒纏綿たる情景を眼前に現出させるものが多い。李白や白居易の自然描写は、例えば「秋色、梧桐に老ゆ」といっただけで深まる秋を肌を感じさせるものがある。それに対して、「少年老い易く学成り難し」（朱熹）とくれば、もう既に始めからお説教である。もっとも、おそらくこの詩は最初からお説教のつもりで作られたのであろうが、お説教を詩にすること自体、唐人には考えられなかったことであろう。

ところが、宋代の絵画には見事写実的自然描写、情感あふれる描法をもったものが少なくない。特に北宋の画院にその傾向が強い。徽宗帝は、画家に詩句を示してその詩意を描かせた、といわれるが、一方では「画論」が書かれるようになるのもこの頃からである。それは、描かれる対象のもつ「気」の表現、あるいは描き手の「気」をどのように表現するのかという議論にも発展した。これは宋学のもつ気論の反映であるが、一体に初めに理念を構築し、その理念に向かって芸術を作りあげるという姿勢が、いかにも近代的思惟に通じる。

文学と環境というと、今日的には珍しくもないが、一千年前の自然意識を考えるとといえば、違った側面を見い出すことが出来よう。そんな思惑から、来年度には日本宋代文学学会と日本道教学会という二つの学会との共催行事を予定している。いずれも中国文学、中国宗教に関わる専門学会であるが、フィロソフィとしての自然を考えるには、かなり興味ある展開が期待される。

コンサベーション心理学の可能性

価値観・行動ユニット：大島 尚



2014年3月15日（土）15時より、ウースター大学（アメリカ・オハイオ州）のスーザン・クレイトン教授を招いて、特別セミナー「コンサベーション心理学の可能性—自然を思いやる心を育てるには—」を開催した。自然保護の観点から人間と自然環境との関わりを研究対象とするコンサベーション心理学は、環境問題を扱う人間科学として近年注目されており、応用的な研究も含めて急速に発展している分野である。クレイトン氏は、その第一人者と目される研究者であることから、はじめに氏の講演を聞いたのち、価値観・行動ユニットの堀毛一也教授による指定討論と、参加者を交えた全体討論という流れでセミナーが進められた。

クレイトン教授の講演は、「自然の中での自己発見：人間と自然界とのつながり」と題するもので、まず自然環境との心理的なつながりに基づく個人のアイデンティティ（環境アイデンティティ：EID）の概念による問題提起から始められた。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、自然観探究ユニット、価値観・行動ユニット、環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

そして、EID が人々のウェルビーイングや気候変動に対する危機感、環境保護の行動に影響することを示し、EID を形成する要因として個人の自然体験、文化や国、および社会的体験が重要であると指摘した。特に、社会的体験の例として動物園や水族館の意義が強調され、人間と動物との比較や自然の価値に対する社会的規範、さらには動物に対する感情的なレベルでの共感を通して EID が高められ、その結果として環境問題への関心が強まると主張した。いずれの話題も調査や観察による実証データに基づいて述べられ、非常に興味深く、かつ説得力のある内容であった。最後に、現在中国で進めている研究プロジェクトの一端が報告され、これまでの知見を反映した環境教育の実践による効果を調べる計画であることが紹介された。

堀毛教授は、自身がポジティブ心理学の立場から行ってきたサステイナブル心性や主観的ウェルビーイングに関する研究を紹介しながら、EID 尺度と心性尺度の関連性、文化差の問題、コミュニティを単位とする研究の必要性などについて質問をした。



クレイトン教授は、いずれも今後の問題として重要であり、協力的に研究を進めていくべきテーマであるとの見解を述べられた。

その後、参加者からの質問やコメントが多数出され、活発に議論が行われたが、特に文化差にかかわる問題が多く取り上げられ、今後は日本やアジア諸国などで同様の研究を進めるべきであることが合意された。コンサベーション心理学の立場からの研究は、日本ではまだほとんど行われていないことから、まずは日本人を対象とした実証研究を積み重ねていくべきであることが、価値観・行動ユニットのメンバー間で強く意識された。

(2014年3月15日開催)

ARAKAWA+GINS という経験 – 22 世紀身体論を目指して – の参加報告

環境デザインユニット：稲垣 諭



2014年5月24日に東京都三鷹市にある天命反転住宅内にて上記のトークイベントが催された。TIEPhの第三ユニットに所属する稲垣が、話題提供者として「未来の環境デザイン」についての発表を行ってきた。その他の講師として、関西大学文学部教授の三村尚彦先生、高千穂大学人間科学部準教授の染谷昌義先生、コメンテーターとしてシステムアーティストの安齋利洋先生が、それぞれの発表および発表へのコメントを行った。

荒川修作および彼の作品とのかかわりは、TIEPhの創成期に遡る。哲学的環境デザインを彫琢するための筆頭モデルとして取り上げられたのが彼の作品群だったからである。本イベントでは、荒川が先を見据えていたはずの22世紀の身体論をテーマとして議論が行われた。今からおよそ100年後に生きる人間はどのような身体をもち、どのような環境で暮らしているのか。結論が出るはずのない問いを共有することで何が見えてくるのかがテーマの核心である。参照点として現在から100年前の身体を振り返ってみると、世界人口が20億人、日本の人口が4000万人、日本人の平均寿命は40代半ばの時代である。それは、感染症との闘い、数々の戦争の勃発、高度成長の息吹がようやく感じ取れるような時代であった。おそらく100年前の人間で、現代の私たちの生活を予測できたものは誰もいなかった。だとすれば、100年後の身体を考えるには、どの程度の可能性を見積もっておけばよいのか。

発表者の三村は、心理療法師のジェンドリンの研究をきっかけに荒川修作にたどり着き、そこから「有機体一人間」という世界を人間化する概念の検討を行った。染谷は、心身問題の軛から身体を解放し、精神が制御する身体ではなく、環境という意図に埋め込まれた身体への転回を説いた。稲垣は、荒川の基本タームである「ランディング・サイト」、「クリービング」、「ブランク」を手がかりに、どのようにすればそれぞれのタームに含まれる経験のネットワークを再編できるかを検討した。

ランディング・サイトの集合体が環境内で再編されると、有機体一人間は新たなものになってしまう。たとえば知覚のランディング・サイトが、イメージのランディング・サイトに圧倒されてしまうと統合失調症の病態に近づき、知覚とイメージのランディングの範囲が正確に重なるようになると、自閉的な字義通り性が発現する。だとすれば、これまで着地したことがないところへのランディングを身体能力の拡張とともに行うことが、22世紀の人間の可能性につながるようになる。そのさいの環境の設定はどのようなものであるべきか、最終的には結論には至らないにしても、多くの可能性を吟味したトークイベントであった。

(2014年5月24日開催)

方法論研究会「方法としてのオートポイエーシス」

環境デザインユニット：武藤 伸司

本センターの河本英夫研究員が、2014年3月1日に東洋大学国際哲学研究センター（IRCP）の主催する方法論研究会で、「方法としてのオートポイエーシス」という講演を行った。河本研究員の提唱する「オートポイエーシス」の理論は、TIEPh第三ユニットの研究目標である環境デザインの探究と実践における骨子であるだけでなく、現代哲学を牽引する重要なものである。講演では、オートポイエーシス研究の歴史的な変遷と基礎的な解説が中心となった。

オートポイエーシスという理論は、自然科学ないし経験科学の成果を用い、それらから哲学的な原理として昇華したものである。それは、ある何らかのシステムにおける自己組織化という事態そのものを指摘したものであり、その指摘は、単に外的な観測によって説明されるのではなく、システムそれ自体の発生におけるそのプロセスを内側から記述するものである。このオートポイエーシスという概念は、もともと諸科学の研究成果より発生したものであるという来歴からすれば、学際的な性格を持つのは当然であるが、しかしこの点こそが重要であり、オートポイエーシス概念の内実は、科学、芸術、医療などに寄り添う中で、つまり、その現場で生じている実践的、活動的な事態に寄り添う中で、把捉されるのである。河本研究員による今回の講演は、主催のIRCPの方法論研究だけでなく、TIEPhの研究指針を確認する上でも、重要なものであった。



(2014年3月1日開催)

2014 TIEPh 活動組織 (2014.4 現在)

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表(センター長) 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tsutomu SAGARA	Professor, Nature Unit	相楽 勉 自然観探求ユニット
Tahoko SAKAI	Associate Professor, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Ryosuke YAMAMOTO	Associate Professor, Nature Unit	山本 亮介 自然観探究ユニット
Asako NOBUOKA	Lecturer, Nature Unit	信岡 朝子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Kazuya HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Kazunari YAMADA	Professor, Values and Behavior Unit	山田 一成 価値観・行動ユニット
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Satoshi INAGAKI	Research Fellow	稲垣 諭 客員研究員
Yoshiya TAMURA	Research Fellow	田村 義也 客員研究員
Taisuke KARASAWA	Research Fellow	唐澤 太輔 客員研究員
Yoshie HAYAKAWA	Research Fellow	早川 芳枝 客員研究員
WANG Yuan	Research Fellow	王 媛 客員研究員
Shinji MUTO	Research Fellow	武藤 伸司 客員研究員
Dai IWASAKI	Research Associate	岩崎 大 研究助手
Hideto NOMURA	Research Supporter	野村 英登 研究支援者
Hayato MASUDA	Project Research Assistant (PRA)	増田 隼人 プロジェクトリサーチ アシスタント

ニュースレター19号 平成26年8月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所: 東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel&Fax: 03-3945-7534

E-mail: ml.tieph-office@toyo.jp Website: <http://www.toyo.ac.jp/site/tieph/>